

氏名	吉川 達
学位の種類	博士（日本語教育学）
学位記番号	博 甲 第 9347 号
学位授与年月日	平成2年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日本語学習者の日本語読解能力とワーキングメモリに関する研究

主査	筑波大学	教授	博士（言語学）	小野 正樹
副査	筑波大学	准教授		木戸 光子
副査	筑波大学	助教	博士（国際日本研究）	伊藤 秀明

論文の要旨

本研究は、日本語学習者の日本語読解能力とワーキングメモリの関係について、両者の相関関係、第二言語（L2）ワーキングメモリや第二言語リーディングスパンテストをどう捉えるかについて明らかにしている。ワーキングメモリとは、情報の処理と短期的な保持を同時に行う脳の記憶システムである。第1言語（L1）ワーキングメモリとL2言語読解能力の間に相関があること、漢字圏学習者においては、ワーキングメモリが大きいことが習熟度を超えて日本語読解に対して有利に働くこと、非漢字圏学習者においてはワーキングメモリが小さければ習熟度が高くとも日本語読解がうまく進められないことから、ワーキングメモリが日本語読解に与える影響を実証的に示している。第1章は研究に至った経緯、ワーキングメモリと読解能力に関する研究を取り巻く状況、ワーキングメモリ関連の先行研究について述べ、第2章では本研究の調査で使用した各能力を測定するテストについて説明している。第3章から第5章が分析内容となっており、4つの課題に取り組んでいる。

課題1：日本語学習者の日本語読解能力とワーキングメモリの相関について

第3章では、日本語習熟度上位群において、L1リーディングスパンテストと内容理解テスト、およびL1リーディングスパンテストと連文予測テストの間に中程度の相関があることから、L2習熟度が高いL2学習者のワーキングメモリとL2読解能力に相関があることを確認する。また、3つの読解テストのうち、一般テスト形式テストとの間には相関が見られなかったことから、読解時に働く能力によってもワーキングメモリの関与に差があることを指摘する。

課題2：ワーキングメモリが大きいことは日本語読解を成功させるための必要条件か

課題3：漢字圏日本語学習者と非漢字圏日本語学習者で異なるのか

第4章では、ワーキングメモリが大きいことが日本語読解にどの程度有利に働くのか、また日本語読解ができるために、ワーキングメモリが大きいことは必要条件なのかを検討する。方法として漢字圏日本語学習者、

非漢字圏日本語学習者に分け、それぞれの中で、日本語習熟度の高低、ワーキングメモリの大小によって群分けを行い、群間の各読解テストの平均値を比較する。日本語習熟度中級程度では、ワーキングメモリが大きい学習者が、日本語習熟度がより上位の中上級程度でワーキングメモリが小さい学習者と同程度の高い日本語読解能力を発揮することから、ワーキングメモリが日本語習熟度を補償し、日本語読解に対して有利に作用している。ただしこの傾向は全ての読解テストで同じように見られるわけではなく、一般テスト形式テストについては、習熟度が高い群の方が読解テストの得点が高いことから、内容理解テストであればある程度まとまった文章を読んで理解する能力のようなワーキングメモリの働きがより強く関与する読解においては、中級程度の日本語習熟度であればワーキングメモリが大きいことが日本語習熟度を補償し、日本語読解に有利に働いていることを述べる。

非漢字圏日本語学習者については、日本語習熟度が高い非漢字圏学習者の中で、ワーキングメモリが大きい学習者群と小さい学習者群に分けて両群の読解テストの平均値を比較したところ、ワーキングメモリが大きい学習者群が、小さい学習者群よりも読解能力、特に内容理解テストの平均値が高いことから、非漢字圏学習者においてもワーキングメモリが大きいことが日本語読解に有利に働いている。ただし非漢字圏学習者は、ワーキングメモリが大きい群であっても、日本語習熟度が同程度の漢字圏学習者よりも日本語読解テストの平均値が低く、さらにワーキングメモリが小さい群においては、読解テストの平均値が極めて低い結果から、ワーキングメモリが大きいことが日本語読解に有利に働くとは言い切れなく、ワーキングメモリが小さいことは、日本語読解に非常に不利な条件となることを述べる。

課題 4 : L2 ワーキングメモリ想定の妥当性について

第 5 章では、日本語習熟度が中上級程度まで進んだ段階においては L2 ワーキングメモリの想定は妥当ではないが、日本語習熟度がそれほど進んでいない段階では、L2 ワーキングメモリの想定は妥当であると主張する。日本語習熟が進んだ段階では、L2 リーディングスパンテストによっても L1 リーディングスパンテストと同様の潜在的なワーキングメモリが測定されるため L2 ワーキングメモリを想定する意味がないこと、日本語習熟が未熟な間は L2 リーディングスパンテストによって言語分析的な処理に関わるワーキングメモリが測定されるため、これが L2 ワーキングメモリの特性となることを結論とする。

審 査 の 要 旨

1 批評

日本語学習者の日本語読解能力とワーキングメモリの関係を明らかにしようとするもので、他言語では、本分野の研究がなされてきたが、日本語教育においては、今まで明らかにされていなく、特に第 1 言語と第 2 言語でのワーキングメモリの異なり、そして、日本語習熟度とワーキングメモリの関係を、複数のテストを利用して明らかにしている。

L1 ワーキングメモリと L2 読解能力の間に相関があったことは、先行研究では見られなかった結果である。さらに、漢字圏学習者においては、ワーキングメモリが大きいことが習熟度を超えて日本語読解に対して有利に働くこと、非漢字圏学習者においてはワーキングメモリが小さければ習熟度が高くとも日本語読解がうまく進められないことも明らかになり、ワーキングメモリが日本語読解に与える影響が実証的に示されている。さらに、L2 学習者を対象としたワーキングメモリ研究において L2 ワーキングメモリや L2 リーディングスパンテストをどのように捉えるかということについて、先行研究では L2 習熟が進んだ学習者だけが取り上げられ、L2 ワーキングメモリの妥当性について具体的に述べられることが少なかったが、L2 ワーキングメモリ想定が

妥当かどうか L2 習熟度によって異なることが示されたことは、一つの成果と言ってよいであろう。このように傾向を指摘していることはよいとしても、読解力と漢字力の関係は不明で、学習者の漢字の能力とワーキングメモリの関係については答えられない。これは今後の課題とし、さらなる研究の進展と、日本語教育への応用が望まれる。

2 最終試験

令和 2 年 1 月 27 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審査の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（日本語教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。